

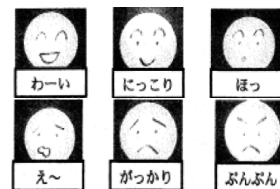
道徳授業を通じた児童の道徳性の発達過程

—社会文化的アプローチに基づくワークシートの記述の検討—

一柳 智紀
(新潟大学)

【問題と目的】 近年、社会・文化・歴史的な文脈における他者との関わりの中で道徳性の発達を捉える必要性が指摘されている(例えば臼井・茂呂, 2006)。この流れを主導する Tappan(2006)は社会文化的アプローチに基づき、道徳性が日常生活に位置づいた「ヴァナキュラーな道徳言語」に媒介されていると主張し、道徳性の発達には、他者との関係性の中で「ヴァナキュラーな道徳言語」を「専有」する(他者に属するものを自分のものとする)過程であるとした(Tappan, 1998; 2006)。しかし、道徳授業を通じた道徳性の発達については未だ十分な研究がなされていない。そこで本研究では社会文化的アプローチに基づき、道徳授業において扱う道徳的価値を含んだ資料について児童が自身の考えを表現する言葉を道徳性を媒介する言語として捉え、継続的な観察により、それら児童が用いる言語がどのように変化するかを検討する。それにより、道徳授業を通して、児童の道徳性の発達過程を明らかにすることを目的とする。

【方法】(1)観察 N県内の小学校1年生学級(40名)において実施(11月～3月に各月1回の計5回)。当該学級では「多様な感じ方・考え方に接しながら自分を見つめ、よりよい自己の生き方を目指していく子ども」の育成が願いとして掲げられていた。そして、資料中の人物や自身の判断や気持ちについての考えを、「表情カード」(右図)を用いながらワークシートに記述し、それを交流することで異なる



考えに目を向け、自分の考えを見直すことがねらわれていた。**(2)ワークシートの分析** まず、資料中の人物や自身の判断や気持ちについての記述の文節数を産出した。次に、担任教師の願いやねらいに基づき、その記述に①同一人物の立場からの異なる考えや②複数の登場人物の立場からの考え、③①②のうち、「でも」や「けど」など、複数の考えの間での対立や葛藤を示す記述が含まれているかを同定した。次に、「専有」という観点から、児童による表情カードの使用方法が①教師が提示した表情のままか、②提示された表情を基に児童がアレンジを加えた表情か、③提示された表情にないオリジナルな表情かに分類した。

【結果と考察】 資料中の人物や自身の判断や気持ちについての記述を分類した結果が下表である。平均文節数を実施月間で比較したところ有意差($F_{(4, 124)}=6.45, p<.001$)があり、12月と2月は11月よりもそれぞれ有意に平均文節数が多かった

	11月	12月	1月	2月	3月
平均文節数(SD)	9.81(8.80)	19.77(13.45)	15.75(12.72)	21.84(18.35)	14.50(9.78)
同一人物の立場からの異なる考えを記述した児童数(人)	15	11	24	12	17
複数の登場人物の立場からの考えを記述した児童数(人)	0	19	1	19	6
うち、対立・葛藤が示された記述	6	15	22	17	8

ワークシートに記述された道徳性を媒介する言語の変化

11月 < 12月 ($p<.01$), 2月 ($p<.05$)。また、差のなかった1月と比べ3月の標準偏差は低いことから、3月では児童間の記述量の差が縮まっていることがうかがえた。一方、同一人物の立場からの異なる考えや複数の登場人物の立場からの考えを記述した児童数は一貫した変化はなく、課題の相違による影響がうかがえた。ただし、両者の記述を行った児童数を合わせると11月より12月、1月、2月の方が多いたことが示された。さらに、異なる考えの間での対立や葛藤を示す記述を行った児童数も11月から1月にかけて増加していた。次に、表情カードの使用方法について、教師から使用の指示がなかった2月を除き比率の差を検定したところ有意差が見られた($\chi^2(6)=22.16, p<.01$)。残差分析の結果、11月は教師が提示した表情のまま用いた児童の比率が高く、オリジナルな表情を用いた児童の比率は低いのにに対し、12月になるとアレンジした表情やオリジナルな表情を用いた児童の比率が増え、1月、3月にはオリジナルな表情を用いた児童の比率が11月に比べ有意に高くなった。

以上から、当該学級における児童の道徳性の発達として、立場の異同にかかわらず異なる複数の考えや、その間での葛藤を表現する言語を児童が「専有」していると推察された。さらに、このような「専有」は児童による表情カードの「専有」に媒介されていると推察された。これに関連し、授業観察から、教師はワークシートの形式や掲示方法を変更することで表情カードの使用を児童に委ねたり(足場はずし)、課題に応じて再度表情カードの使用を促したり(足場のかけ直し)し、児童自身が表情カードを用いながら資料についての考えを表現することを促していた。